魚釣り

上川北部医師会
しべつ耳鼻咽喉科あらかわクリニック
荒川（あらかわ）　卓哉（たくや）

高度経済成長末期、夕暮れ間近の川面を流れる毛ばり。切り立った川岸からは魚が見えるが一向に釣れる気配はない。見える魚は釣れないんだと親父の言葉が耳に蘇る一番古い釣りの記憶。

東北の地方都市、ご当地富士を望む大きな池のある市民憩いの公園。一角が釣り堀で、大人たちは静かに鮒釣りをしている。雑貨屋の店先にあるおもちゃのような竹の継竿に玉ウキと返しのついたままの釣り針一つ、バラケもなくタナを取ることも知らず頭上の枝に引っ掛けてばかり。暑い夏の日、あっちに魚がたくさんいるぞと近くの大人。なんでもその日魚を放流したのだとか、言われた方へ行って覗くと確かに魚が群れている。竿もなしに釣り糸を垂らすと、いとも簡単に次々釣れた。厄介払いされたのだと家族からは笑われた。

東北の中心都市、親父の故郷の郊外、屋敷林に囲まれた家が点在する海岸近くの田園地帯の小川、小鮒が入れ食いとなった。大人になってからもいくつもの記憶を重ねた大切な風景だった。でも2011年の大津波が海岸沿いの防風林を巨大なコンクリート防潮堤に変えてしまった。

東北の地方都市､市内中心部を流れる穏やかな川。放課後自転車を飛ばして、川面から頭を出している石がいつものポイント。町を離れて40年訪れる機会のなかったその場所に、当時の自分ぐらいの息子を連れて訪れたことがある。川面から頭をのぞかせる石まで同じ川の脇には、これも40年前そのままの釣具屋があり、安い竿を買って餌を流したら釣れた。

親父の渓流釣りにもたまに連れられて行くようになり何度目だっただろうか、言われるまま仕掛けを流していてまた川底に引っ掛けたと思い竿をシャクっていたら、横から手を掴まれて上げると釣れていた天然イワナ。釣ったとは言えない、きっと魚も納得できなかったろう。家に帰ってから親父がお袋の前で嬉しそうに､お前が一番大きいの釣ったよな､と。

親父の転勤で北関東へ。引越先は３県が接する県南の町。どうしてそこにたどり着いたのか、自転車をこいで県境のその気になれば飛び越せそうな小さな川。ぽつりぽつりと釣れるタナゴかと思うような小鮒。白い雲が浮かぶ夏の空からは雲雀の声が聞こえていた。

引越後も親父は渓流釣りに行っていたけれど、東北と違いほとんどの川は入漁料が必要で放流魚ばかりのようだった。その頃よく連れて行ってもらったのが江戸五街道杉並木の先の管理釣り場。川は落ち込みごとにゆるく区画が区切られていてそこでイワナやヤマメを釣るようになっていた。管理区域の下流には広いトロ場とさらに下ると砂防ダム、ここに魚が溜まっていた。管理区域の食いが鈍くなると独りで川を下っていった。たまに大人が一人二人いて子どもがくると迷惑そうな顔をされたが。その頃からもう40年以上。気になって調べてみると釣り場は今でも続いていた。

子どもの頃から憧れた氷上ワカサギ釣り、北の地で暮らすようになり実現した。原生林の谷間に広がる大きなダム湖、冬には２メートルの積雪とマイナス30度の厳寒地。ワカサギのほかにアメマス、サクラマス、そしてイトウ。外来魚の姿のないきれいな湖。頼めば離れた場所まで湖上をスノーモービルで送迎してくれる。あたり一面真っ白な湖上にバス停ならぬスノーモービル停が立っていて、帰りの時間を伝えて降ろしてもらう。岬の陰に入れば見渡す限り人影もなく、晴れていれば真っ青な空と真っ白な雪原、雪が降り始めるとすべてが白。聞こえるのはリールを巻く音とテントが時折風にはためく音、雪が降れば雪がサラサラと滑り落ちる音ぐらい。マス狙いの竿先の鈴が鳴るのを待つ静かな世界。

大人になるまで機会がなかったが、釣りの種類を選べば船釣りの敷居も高くないと知り、時折釣船に乗るようになった。川に連れてゆくには子どもたちはまだ小さく手巻きリールでカレイ釣り。遠ざかる陸地と水平線、船が立てる波しぶきに子どもたちは目を輝かせその横で３人分の竿を準備する自分は釣り場に着く頃には軽く船酔い。次々と上がる大小のカレイと歓声の横で自分は魚を外して餌をつけるの繰り返し。自分も少しは釣りたいと思う気持ちと魚の処理が頭をよぎりながらも幸せをかみしめる。船頭さんが撮った写真が釣り新聞に大きく掲載されていた。

北の海に向かう川の源流域、ヤマメとオショロコマの川。そこに住むのはもちろん魚だけではなく、そこは熊や鹿の住処でもあって、鹿が驚いて走り出す姿は美しいがまだ新しい熊の糞を見ると緊張する。２匹のスズメ蜂がずっと頭上を偵察しているのも怖い。胸丈ほどのフキやイラクサを踏み倒す音とクマよけの鈴の音のほかは川の流れと鳥の声、ときおり通り抜ける風にざわめく木々の音だけ。仕掛けを流せば魚たちがキラキラと竿先をふるわせる。そしてかつて親父がそうしたように、少し大きくなった息子を連れていく。

最近は釣りに出かける機会もほとんどないのですが、記憶の中の釣りを綴ってみました。いつまでも魚釣りのできる自然と平和が続くことを祈っています。